



代表取締役 牛尾光隆氏



牛尾光成氏

消費者に農産物を買ってもらうばかりではなく、一緒に農地を守っていくことを考えていかなければと思います。

西区金武地区で代々農家を営む牛尾さんご一家。現在は法人化し、お米をはじめ、季節の様々な野菜や甘くて人気のぶどうを手掛けています。この日のインタビューは、農業大学校に進学し親の跡継ぎで農業をするのは当たり前と思っていた父・光隆さんと、農業を継ぐきっかけは特になかったが、今は作るのが面白くて、農業を続けていきたいと笑顔で話す息子・光成さん。農家の高齢化と農地の荒廃など、とても厳しい状況はありながらも、「都心部からここまでは車で30分。いろいろな人たちに関わってもらって森林や農地を守っていくやり方があるのではないか」というお話からは、福岡スタイルの農地の保全の可能性を感じました。

—金武で昔から様々な作物を作られているんですね。

光隆: ホームページにも書いていますが、100年以上農家をやっています。農地は2haちょっとあって、借りている土地を合わせたらその倍くらいです。ぶどう園は全部で8反くらいです。作物の中では米作りが一番永く、その他に野菜も作っていて、ぶどうの直売もしています。冬の今の時期は、カブ、大根、小松菜なんかを作っています。金武でぶどう栽培が始まったのは昭和38年頃です。米以外に収入を上げるために国の事業で参入しました。今のかなたけの里公園のキャンプ場エリアや星の里は全部ぶどう園だったんですよ。



うちのぶどうはインターネットで通販もしていますが、直接足を運んで購入いただいているお客さんがほとんどです。ぶどう組合は以前は30~40軒あったんですが、その後採算が合わなくなったり、手がかかったりして、段々少なくなったんです。でも、私やもう一人別の人が平成に入って直売して売れるようになってから組合を作ってまたみんなで売れるようになりました。直売するようになって、ここ何年かでお客さんもかなり来るようになりました。都心部からも近いからですね。

光成: 僕はぶどうをつくるのが面白いし、他の野菜より単価の面でも計算ができるので、柱として作っていきたいと思っています。

—若い方も作業されてましたが、何人位いらっしゃるんですか？

光隆: 社員は一人で、週何回か手伝いに来ていただいている方が大体2~3人。学生のアルバイトもいます。あとは、新規就農希望者を短期研修で結構受け入れました。



—この10年の農業の雰囲気はよくなっていますか？

光成：野菜の値段が上がっていないので、良くなっている感じはないです。物価高で経費がどんどん上がっても野菜の値段は中々上がらないという状況です。

光隆：肥料価格は少し落ち着きましたが、米や野菜の値段は上がりませんね。前に比べたら耕作放棄地や荒れ地も増える可能性が高まっていると感じます。今70歳以上の方が支えている米作りも、後10年継続するというのは難しいのではないのでしょうか。若手も少なく、米はそれ程割りも良くないから引き受け手も少ないでしょうし、場所によっては荒れる農地がどんどん出てくるでしょうね。土地を引き受けて大きくしているところもありますが、条件の良い土地でないと難しいのが現状です。それに、この辺は猪の被害も酷いんですよ。ここ10～15年くらい特に酷くなってきて、餌がなくなって山から下りて来たりしています。あと、この周辺でも空き家も多くなっています。

光成：子どもも継がないでしょうし、10年後は土地がどんどん荒れていくと思いますが、気にしない人は結構いると思います。昔は受け継いだ土地は綺麗にしておかないと、というのがあったけど、僕らみたいな若い世代はあまり思っていないんじゃないですかね。

光隆：今後、農地が荒れても年配の人たちはどうしようもできなくなって、水路が詰まったり、周りの藪に虫が出たりと、農業を続けている人に影響が出てきます。これからは、例えば行政が管理したり、管理する担い手を育成したりしていかなければと思います。

—農地が荒れていく中で、場所によっては森に還る農地も出てきそうですね。

光隆：綺麗にしていた棚田もありましたけど、汚くなってきて森に還っても仕方ない場所があります。緑が増えても人が入らず管理できてなければただの荒れ地と変わりませんし、木を植えても管理はしていかないといけない。管理して草を刈ったり、何か植えたりするから緑として保全されていくんです。ですから、緑の基本計画では、農地を位置づけたゾーンに荒れ地が入ってこないようにしないといけないと思います。例えば、キャンプ場などをしながら農地を少しでも残して、荒れてきたら眺めのいいところを花畑などにして管理してもらいたい。そこに都心部の人が見に来くるという事例も結構あります。

—若手世代は増えていますか？

光成：新規就農者で一から始めて稼げる人はあまりいないので、新しく入ってくる人は減っていく一方です。

光隆：高齢の農家では、今使っている農機具が使えなくなったら、何百万円もする機具を買い替えてまで農業を続けないから、誰かに頼むか辞めるかになります。土地を借りる人もいないから、人に迷惑が掛からないように、他の農家に管理料を払って草刈や耕してもらうこともあります。農地は簡単に宅地にはできないですし。新規で何人か入った人もいますが、3～4年して辞められました。農機具を持たずに始めても、余程の考えが無ければ成功することは難しいと感じます。



—そんな中、光成さんが農業を継ごうと思ったきっかけは？

光成：きっかけをそんなに考えたことは無いですが、ぶどうを作ってお客さんに直売するところにやりがいは感じます。子どもの頃は手伝ってなかったですけど(笑)。

光隆：自分も手伝ってなかったです(笑)。私の所は、後継者ができたということが法人化したきっかけの一つでもあります。

—福岡市らしい農業スタイルや里山景観はどのようなものだと考えますか？

光成：この辺りは畑・田んぼが狭く、形も悪いので、北海道のように規模で勝負するスタイルは不向きです。

光隆：レストランやスーパーとの直接提携は出荷を切らさないようにしないといけないので、大規模でないと難しいですね。6次化して、加工品まで作るというのも大規模な農地で大量に生産する必要があって、個人の農家でやるのはなかなか難しいです。



光成：福岡市は人口も多くてお客さんもいるので、ぶどうやいちごのように広くない面積でも高品質なものを作って、直売所を設置して都心部の人たち向けに販売していく農業は向いていると思います。実際、ぶどうのシーズンでの直売でお客様とお話する時に「美味しかったよ!」「あなたの作ったものが良い!」と言っただけだと本当に幸せに感じます。都心部の人には自然と触れ合いたいと思う人が多いように見えるので、貸農園や市民農園で農地に触れ合って、野菜作りを体験するのもいいと思います。これは農地が荒れるのを防ぐことにもつながります。

光隆：福岡市は人口も多いし、都心部から30分もあれば来ることができるじゃないですか。だから、いろいろな人たちに関わってもらって森林や農地を守っていくやり方ができるのではないのでしょうか。

いちご狩りも最近増えてきています。消費者の方たちに農産物を買ってもらうばかりではなく、その人たちと一緒に農地を守っていくことを考えていかないといけないと思います。

